

全学連第72回定期全国大会

第一議案〔総括〕

2011年9月9日~10日
提出：中央執行委員会

【1】はじめに

(1) 歴史が動こうとしている。あらゆるものが煮詰まっている。

◎3・11で明らかになった社会の真の姿。「全部嘘だった」

被災地の現実、放射能も何もかも、政府が「解決不能」をさらけ出している事態です。津波対策切り捨ても原発も、始まりが国家の犯罪なら、その後の被害の拡大もすべて国家の犯罪だと断じなければなりません。

次々と明らかになる腐敗の深さは、歴代自民党と民主党の政府、経産省や文部科学省、資本・財界、大学、マスコミ、裁判所、労働組合の腐った幹部連中……どこまでも広い。「原子力ムラ」などという言葉は生ぬるい、「原子力マフィア」「原子力帝国」だという怒りの声が上がっています。

腐敗のあまりの深さと癒着のあまりの広さゆえに、根本的に社会を変えなければならぬし、変えられる闘いだということ意識が全社会に広がりつつあります。

そして立ち上がり始めた無数の人々の決意の強さは本物です。子どもの世代にこんな社会を渡せない、そういう決意です。こういう時に歴史は動く。3・11からちょうど半年の9・11の爆発は不可避だと思えます。東京都がアルタ前広場の半封鎖状態をつくっているのは、そういう気運を感じてのことでしょう。

◎時代の煮詰まり。今までの歴史的に積み上げられた矛盾の爆発

社会の腐敗、人々の闘いへの決意とともに、時代もまた、歴史が動こうとしていることを示していると思えます。

中東・北アフリカにおける動乱は、チュニジアやエジプトから始まり、とりわけ青年・学生が先頭にたった革命として進行しています。他方でリビアに対する「革命」を語った侵略戦争の開始は、支配階級の巻き返しとしての介入の始まり、青年・学生の反乱に対する戦争を意味しています。

そしてイギリスにおける青年の「暴動」と言われる闘いも始まっています。

アメリカを中心とした世界経済の崩壊の開始は、今まで若者にすべての矛盾を押しつけてなんとか続いてきたような資本主義社会の崩壊の始まりです。

日本の原発デモに込められた青年・学生の思いもまた、未来を奪われてきた世界の青年たちと同じものが流れていると言えます。

あらゆるものが煮詰まって、歴史が今動こうとしている。

◎学生がこの情勢の最先頭に立つことが求められている

求められているのは、学生の巨万の行動です。全社会的な運動を勝利に導くための戦略と勇氣です。本大会の中心課題はここにある。

一方で大学の腐敗もまたとめどもなく深いです。大学を変える責任が学生にあることはあきらかであろうと考えます。

他方で学生の行動を縛り付ける鎖の多さ。単位、就職、奨学金……すべて新自由主義という方であり、こうした大学の腐敗こそが原発事故として火をふいたと言えます。

新自由主義というあり方を打ち破って学生が立ち上がり、運動の先頭に、歴史の先頭に立つことができるのか。問題はここにあり、原発反対の声を上げることと、大学のあり方を問うことは一つの問題だろうと思います。いかなる運動を作りだしてこれをうちやぶるのか。このことをめぐって真剣な議論を行いたいと考えます。

(2) 3・11からの半年間の闘い

年間の闘いの地平

◎大衆運動の季節の到来。価値観の急速な変化。ここに結びつく運動であり得るのか

私たちの運動が、今までのまだまだ狭い発想や運動のあり方を突破し、広範に生み出された行動や価値観の変化に結びつくことが求められているということです。3・11以降に立ち上がったような仲間の豊かな発想にも力を借りて、大胆な変革を勝ち取っていききたいと思えます。

◎全学連の闘いの土台にあるもの

他方で全学連の闘いが生み出してきた可能性についても軽視せずにしっかりと運動の土台としていきたい。3・11からの闘い、とりわけ被災地の奇跡のような闘いがあります。そして法大闘争を軸とした闘いの蓄積があります。国家権力や大学資本を相手にして学生が団結して渡り合ってきた闘いは、世界的にも数少ない闘いです。なぜこうした闘いが可能になったのかを明確にさせたい。

◎何より新執行部の樹立の意味するもの

本大会の歴史的意思是、歴史が動くような大衆運動の時代の到来をうけ、今までの蓄積と新しいものの結合にあると考えています。こうした時代が来る前にあらゆる運動の芽をつぶすことに、法大弾圧にかけた敵の狙いがあるとすれば、運動がつぶされることなく、むしろ新たな指導部を生みだし、新しい時代に踏み出そうとしていることは、法大闘争の本質的な勝利を意味している。新執行部をうち立てそうした時代の運動を始める。そのために6年間の総括を普遍的に行い、闘いの土台とし、本来学生が持つ力と可能性を取り戻すような議論となれば幸いです。

(3) 今年後半をいかに闘うのか

◎学生自治会の建設へ

学生は歴史を動かすだけの力を持っているということが何よりも私たちの信念です。学生が団結して行動することが歴史を動かす。そのための組織をキャンパスから作り出す、そこに学生自治会建設の本質があると言えます。

新自由主義大学の矛盾が原発を最大の問題として明るみに出しました。この矛盾をついた闘いを具体的につくりだし、学生の団結した組織を生み出せるのか。ここに勝負です。

◎11月集会へ

労働者、農民、漁民、市民、あらゆる人との連帯を求めて、学生の大結集を作りだしたい。

そして同時に国際連帯の闘いです。反原発×反失業の全世界1000万人の大行動として取り組む。

何より、若者が新たな政治を、新たな潮流を作り出せるのか。青年・学生が鮮烈に時代の最先端に登場するような闘いにしたい。

◎後半戦の情勢は歴史上かつてないほどの動乱

アメリカ経済、EU経済、日本、中国含め、世界大恐慌はこれから二番底に突入していきます。失業問題が具体的に爆発し、労働運動の復権が進むような年になると思います。こうしたかつてない動乱の時代に、学生運動が目に見える形で登場する。そのために二日間の討論をやりきりたいと思います。

【2】3・11に立ち向かい掴み取ってきたもの

(1) 3・11の本質と半年の闘い

◎1万5千を超える死者、4千を超える行方不明者。

「天災」など大嘘であり、すべて人災です。「200年に一度の災害に出す金はない」などと言って災害対策費用を削減したのは民主党の「事業仕分け」だった。地元が堤防を要求しても「金がない」と取り合ってすらこなかったのが今の政治ではないのか。

そして何より原発です。「想定外」ではなく「想定しない」。「想定したら建てられない」。こんなふざけた話はないということです。

怒り、責任をあいまいにしてはならない。闘う以外に解決などありえない。

◎救援がぶつかったもの。高速の封鎖と軍事優先体制

3・11を受けて、東北大の仲間に救援物資を渡すために、ただちに仙台に向かって出発しました。高速道路は自衛隊が優先道路として封鎖しており、救援物資を次々と追いつ返すという事態が起きた。

そしてトモダチ作戦です。有事の軍事訓練のチャンスとして被災地は利用された。「(将来)原発事故や汚い爆弾、テロに対応する可能性」があり、トモダチ作戦で得られた経験は「戦略的価値がある」(米海兵隊エイモス司令官に対し、ヘリコプター飛行隊長)。

そして起きたことは沖縄との分断と新基地建設です。トモダチ作戦を批判した沖縄の新聞にクレームが殺到したと言われています。すべてが分断です。そして3・11を利用して「日米同盟強化」と新基地建設が進められようとしたということです。

◎「政治休戦」と「計画停電」

そして、「政治休戦」キャンペーンです。これを打ち破って3月17日、渋谷で緊急デモを敢行した。会場からは「他の団体は警察の助言をうけてすべて集会をやめている」と。「震災」「がんばろう日本」のかけ声のもとで、一切の闘いがつぶされようとした。

他方で「計画停電」という政府・財界上げてのデマが大々的に行われた。政府・国家というものの本性が明らかになったと言えます。

◎原発事故と政府の対応

そして原発事故です。200万福島県民、30万の子どもたちすべてが切り捨てられ、情報隠しの元で殺人的な被曝を強制され続けている。事故の収束もまったく目途が立たず、核燃料が溶け出して今どうなっているのかも分からない状態であるにもかかわらず、すでに野田政権は「再稼働」に向かって動き出している。こんなことは絶対に許されない。

(2) 3・11を時代認識としてとらえる

1923年関東大震災も、ロシア革命を発端とする世界的な労働運動の高揚と日本への波及(米騒動から炭鉱労働者のストライキへ)から、1929年大恐慌と大失業、世界戦争への重大な転換点として、朝鮮人虐殺と労働運動の破壊のために利用された。

いくら天災と言えども、再びの世界大恐慌と大失業、戦争の危機という中で、3・11を一つの時代認識としてとらえていくことが大事です。

(3) 3・11は新自由主義の矛盾の爆発

◎「復興」の中身は大失業

東北地方を「特区」にすると、最低賃金の規制もすべて取っ払って、国内植民地のようにするということです。ますます新自由主義を進める、これが3・11です。

◎多くの人が立ち上がるのはこれからだ

原発問題も、失業の問題も、すべてはこれからです。

(4) 原発問題をどうとらえるか

◎核と人類は共存できない

現在政府が「除染すれば大丈夫」と安全キャンペーンを張っています。しかしそんなものは全くのデマです。

秘密メモ「放射能物質の兵器利用について」(1943.10.30 ジェイムズ・B・コナント、A・H・コンプトン、H・C・ウレイ、いずれも核開発執行委員会の小委員会所属の科学者↓マンハッタン計画責任者L・R・グロブス宛)には以下のように書かれている。

「放射性物質の軍事利用としては次が考えられる。①汚染地域を作る。効果は遅いが、地域汚染を除去する方法はない。人体を防護する服は開発されそうにない。②毒ガス兵器として使う。呼吸によって人体に取り込まれる。放射能

物質を吸い込んで人を殺すに必要な量は極めて少量で足りる。人体に百分の一グラム取り込まれれば十分致死量となる。こうした損傷を治す手段は全くない。放射能物質は呼吸によってではなく、消化器から身体に入ることもあり得る。貯水池や井戸の汚染や汚染された食物は煙霧の吸入と同様効果的である。放射能煙霧が兵器として効果を増す要因は2つある。①それは感覚に感じられない。②微粒子の煙霧として散布されるので、通常のがスマスクは通過してしまうので効果的である」

今政府やマスコミが言っていることがいかにとんでもないことかということです。放射能、核と人類は共存できない、これが3・11で改めて明らかになったということ事です。

◎原発は階級的な戦争そのもの

原発は作るときから「TCIA」（東京電力版CIA）の暴力によって村の人間関係を破壊し作られて来ました。

また、2000年代までで原発で働いた労働者は120万人であり、そのうち30〜40万人が被曝したと言われています。戦後一貫して、何発もの原爆を落とすような政策が行われてきたと言うことです。被曝労働者の死は闇に葬られたままです。労働者が命を落とせば次の日には被曝手帳を改ざんし隠蔽してきたのが実態です。

やらせメール、情報統制：福島200万県民が被曝し続けている。しかし、政府・東電からすれば当然のように40年もわたってやってきた殺人行為を、福島でも当然のように続けているにすぎない。これは一つの戦争と言うべき現実です。

◎核戦争・核武装の問題

そして核問題は、核兵器・核武装の問題でもある。原発は絶対反対以外にないということです。

◎非正規職と就職難という現実と一ツ

原発で働くのは8次請け、9次請けの労働者だと言われています。事故後の福島第一原発作業を行った人のうち132人がいまだに名前も居場所も分からない。

非正規、就職難という若者・学生の現実を盾にして成り立ってきたのが原発産業です。若者のほとんどが年収200万円以下という現実の他方で、清水社長は5億の退職金。これが原発なのだということです。

◎新自由主義と労働組合

こうした現実の一切が労働組合や学生運動をつぶして始めて成り立ってきました。

レーガンが航空管制官組合を、サッチャーが炭坑労働組合を、中曽根が国鉄労働運動をたたきつぶして開始したのが新自由主義。「国労をつぶし、総評・社会党を壊滅に追い込むことを明確に意識して国鉄分割・民営化をやった」「行政改革によってお座敷をきれいにして、立派な憲法を床の間に安置する」（中曽根康弘）

今の現実は当たり前前ではない。食えないという現実も、それを盾にした原発政策もすべて当たり前前のことではない。労働者の権利を守り、非正規労働など許さない闘いがあれば覆

すことができる現実だと言うことです。

闘う労働者、とりわけ青年労働者を中心として、国鉄分割・民営化に反対し、労働組合を復権する闘いとして、国鉄闘争全国運動が広がっています。こうした労働者たちとともに新自由主義のあり方そのものを覆す闘いが重要です。

（5）原発と大学。新自由主義の矛盾

◎法人化と原子力予算

国立大学の法人化（04年）から科学技術庁と文部省の統合へ。直接原子力予算が大学に流入を開始した。

予算の削減と大学・研究、教育そのものが商品となった。寄付授業（東大に東電が5億円の寄付授業！）、米軍マネーの流入等々が行われてきた。

◎法人化と学生の商品化

就職難を盾に上昇する学費。4割がマネーゲームに使われている。学生は借金を作って就職もないまま社会に放り出され、理事会がボロ儲けしている現実。未来を語るどころか未来を奪われる場所としての大学、これが教育の民営化の現実です。

核心問題は、学生が商品として扱われていることです。

「原材料を仕入れ、加工して製品に仕上げ、卒業証書という保証書をつけ企業へ出す。これが産学連携だ」（2005年 高橋宏・首都大学東京理事長）。

◎学生の主体性を踏みにじり、団結も誇りも奪ってきた。教育の民営化絶対反対。

学生は学問・教育の主体ではなく、授業という商品を買う「お客さん」になっている。「金がない者は教育を買えない、嫌ならやめてくれ」などということがまかり通っている。

歴史とは絶えず古い価値観を新しい世代が打ち破って進むものだとするなら、学生こそが大学の主人公でなければならぬ。大学を学生の手に取り戻す必要があると考えます。

商品として貶められ、「正社員になりたいか」と競争させられている現状は、学生が自分の「将来」と仲間の存在を計りにかけなければならぬ現実。これを突き破って学生が団結していくことに根底的な力がある。本来持つ力と可能性を取り戻す力がある。

【3】法大闘争の勝利とその総括

（1）新自由主義の核心問題

◎学生自治会、寮自治会の解体

こうした大学の腐敗、教育の民営化攻撃は、学生の自主的な運動や団結を解体することを核心に進められてきました。具体的には学生自治会や自治寮の解体です。逆に言えばこれを復権していく闘いこそが求められていると言うことです。

全学連の闘いは、ここを最大の焦点に進められてきたと言えます。

◎国立大学法人化と有朋寮廃寮阻止の闘い

2000年には、現在被災地となっている東北大学で法人化反対のストライキを打ち抜きました。52クラスからストライキ決議が上がり、反対の声が上がった。

さらに2001年には東北大学有朋寮に「廃寮決定」、「10年以内に90%の確立で宮城県沖地震が起きる」という口実の、代替寮もないままの廃寮攻撃に対して寮生が全国的な運動を展開し闘い抜いた。

◎法大闘争の開始

06年3月14日、「掲示物ルール」の一方的適用と立て看板の撤去に抗議した29名の学生が法政大学で逮捕されて始まった。12日間で不起訴・釈放され、6・15には1000人集会が爆発、学生の大闘争となった。118人の逮捕、33人の起訴、退学や停学処分を出しながらも、誰ひとり屈服することなく闘い抜かれてきた。

(2) 法大闘争の重要な意味

◎「二人の仲間も見捨てない」

なんら特別ではない普通の学生の闘いだということです。大学の腐敗を前に、当たり前の葛藤をしながら「仲間のために」を合い言葉に立ち上がって団結していく闘いとしてあることです。

◎学生の団結を回復する具体的闘いとしての不当処分

撤回闘争

学生が団結し、本来持つ力を取り戻し、大学を奪い返す闘いとして、処分撤回闘争という具体的な闘いを作りだしたことです。

◎運動をつぶされるどころか新たな指導部を生み出したこと

国家権力の側は新自由主義の矛盾が爆発することを知っていた。それまでにあらゆる闘いをつぶしたかったというのが敵の本音です。しかし、運動をつぶされるどころか新たなリーダーを生み出して勝利してきたということです。

(3) 反戦・反基地闘争の意味

さらに、学生の持つ可能性を取り戻す闘いとして沖縄米軍基地や成田軍事空港の問題、ヒロシマ・ナガサキ等々、反戦・反基地闘争を取り組んで来ました。学生は商品ではなく、団結して立ち上げれば戦争を止め、社会を変えることができるということです。

(4) 国際連帯の闘いの前進

全学連はこうした闘いをもって、韓国、アメリカ、ブラジル、ドイツと国際連帯を具体的に進めてきました。ここで感じてきたことは、「国際的に私たちの闘いは通用する、わかり合える」ということであり、全世界の学生が等しく「教育の民営化」の現実在必死に立ち向かっているという共感でした。

【4】いかに法大闘争を勝利させてきたのか

(1) 社会を変革する力は学生の中にこそある

私たちの立場は、学生自らの力に依拠し、社会を変革するということです。これだけ学生の未来を奪っている資本や当局、国家権力にお願ひするのか、政治家に代わってやってもらうのか。そうではなく、学生こそが自らの手でこの社会を変えるのだという立場に立つことです。現実の学生は競争に追い立てられ、一見キャンパスが無風に見えようとも、学生こそが未来を代表し、学生の動向がこの社会の未来を決することに何の変更を加えるものではない。重要なことは、いかにして学生が本来持っている力を取り戻すのかということです。

(2) 学生は団結しさえすればどんな困難や攻撃にも立ち向かうことができる。そして、困難や攻撃に真正面から立ち向かう中でこそ団結する。

◎あらゆる攻撃は分断。絶対反対の路線で団結する。

あらゆる攻撃は学生を分断するものとしてあり、絶対反対で闘うこと以外に団結できない。闘いが負けるときは必ず内側から崩れる。これが闘いの歴史だろうと思います。そして、学生が団結すればあらゆる困難を乗り越えることができる。攻撃を真正面から見据えて立ち向かう。身を反らそうと考えたら絶対に勝利できない。むしろあらゆる問題を「団結するための試練だ」と言うぐらいにとらえて闘うことです。

◎学生の持つ力と可能性に依拠すること

だからこそ、いかなる状況にあっても、団結した学生の力を信じて闘うことです。

(3) 時代認識が学生の力を生み出す。

いかなる時代に生きているのか、そしてどう生きるべきなのかをめぐって真剣な討論を巻き起こすことが学生の力を引き出す土台です。歴史が動き出すところに来た今、どんなに小さな闘いの芽も、大きな力を持つ。時代認識とはそういうことです。

(4) 義理・人情こそ出発点であり目的

一人ひとりを大事にしない組織は大事にされない。義理・人情があつてこそ少々の困難があろうとも闘いに立ち上がるということです。そしてこうした団結が強まることこそが学生の武器であり、最大の目的でもあるということです。

(5) 闘いは指導部によって決まる。指導部を作り出すところこそ勝利への道。

こうした立場にたつて、決断できる指導部がいるかどうか勝負です。闘わないリーダーたちの言い訳はいつも「学生は立ち上がらない」という責任転嫁です。闘いは指導部にかかっている。そして指導部が闘いの中から新たに生み出されてくることに勝敗がかかってくるのです。

【5】2011年後半の闘いの課題と

視点

(1) 学生こそ反原発闘争の先頭に

野田政権の発足は、「脱原発」の下に再稼働を狙う巻き返しとしてあります。こうした動きに連合や全労連といった原子力ムラの一角をしめる組合幹部連中が、反原発運動を丸め込もうという新たな段階に入りました。絶対反対を掲げた学生の登場が求められているということです。

同時に、ますます広い人々、まだ行動を開始していない人々をも運動の中に引き込んでいく広さが求められてくる。再稼働を許すのか否かの闘いの中で、強さと広さを併せ持った運動を目指して闘うということです。

「すべての原発いまずぐなくそう！ 全国会議」を武器に、ガンガン闘おう。

(2) 法人化体制を打ち破る具体的な闘いを

さらに、キャンパスで具体的な闘いを生みだし、法人化体制の矛盾をついて、いかに学生の団結を組織するかということです。福島で安全キャンペーンの先頭に立つ御用学者を、フクシマと具体的に連帯して打ち破っていくことに核心があると言えます。

(3) 11月集会へ

すべての闘いを11月集会へ。新自由主義と闘う全国的な、世界的なネットワークを作り出すために闘おう。

社民党や日本共産党はこの期に及んでも、原水禁運動の分裂を反省もせず、狭い党利党略のもとに原発運動を票につなげるような運動をやるうとしている。こんな政治では学生の未来は開かれぬ。ここから本当に新しい運動を、新しい政治を始めるような集会にしよう。